人々が満足する生活とやりがいを提示できる都市を目指して欲しい。

―― 株式会社ネットワーク応用通信研究所　フェロー　まつもとゆきひろ氏

まつもと　ゆきひろ（松本　行弘）
　1965年生。1990年筑波大学第三学群情報学類卒業、2007年より現職。
　1993年からプログラミング言語「Ruby」を開発。国内外に普及しIT産業など各方面に影響を与えている。2009年には地方に独自のIT文化を根付かせ地域活性化に貢献した功績により、在住する松江市の名誉市民に選出。

ITの社会への影響力が増大した 25 年

　この 25 年で IT の社会への影響力は大きくなりましたね。IT は計算の力と通信の力を昔から世の中に提供していましたが、この 20～30 年の間で演算性能や通信容量が向上し、価格は逆に下落する等の変化が起こりました。30 年前にも一定性能の IT はありましたが、大学等の研究で使われていた程度だったのが、一般人でも使えるようになり、多くの人がそうした IT に触れることで社会が変化してきたと言えるでしょう。携帯電話が昔は音声だけを伝達していたのが、今ではメール等のデータも伝達するようになったのは、身近で分かりやすい例ですね。

　昔は TV や電話、コピー機など専用の機器が必要だった様々なものがデジタル化、データ化され、専用機器が不要になって汎用性が向上してきましたが、この動きは今後も進み、様々なものが実質的にコンピュータ化してくるでしょう。地上デジタル対応の TV は見かけ上 TV ですが、実体はデジタル信号を画像に変換し表示するコンピュータです。今後はそれが進んで、もしかしたら TV の姿であることをあきらめて TV と同等の機能を持つコンピュータの姿にシフトするかもしれません。こうしたコンピュータ化、デジタル化、ネットワーク化といった社会変化の方向性は、今後 10～20 年は変わらないだろうと考えています。

地理的条件や時間的制約からの解放が進む

　そうした社会変化が進むと、結果として場所は関係なくなり、地理的条件からの解放が進むでしょう。もう少しすれば TV や PC を介した会議やミーティングが頻繁になってくると思います。現時点でもそれらの技術的課題はかなりクリアされているのですが、ネックになっているのは「実際に会わなくては」という人のマインドです。これが、小さい頃から PC やメールに慣れ親しんでいる今の若い世代が大人になれば、IT を介したやりとりへの抵抗感が薄れる社会になるのではないでしょうか。また、メールの場合はリアルタイムでやりとりする必要がなく、これは時間的制約からの解放を意味します。

　つまり、コンピュータ化した社会が発達すると、人の働き方や生き方が場所や時間の制約か

ら解放される要素が増え、大都市でなくとも地方で仕事や生活ができるようになり、そうした流れが加速していくことでしょう。

IT 業界では既にそうなっています。PC の市民生活への浸透で、同じ島根県の FROGMAN さんのように、地方の個人でも TV や映画の放映に耐えうるレベルのアニメーションを作れるようになりました。つまり PC そのもの、あるいは PC を介して、世界に対する個人の影響力も高まった訳です。こうした世の中では地理的制約はほとんどありません。

人が集い、生の体験ができるハブは必要

人間には便利なものを欲する欲求があります。しかし、その中にはある程度の人口密度がないとコストが合わない物事があるでしょう。従って、インフラや文化施設等が成立する人口密度を持った都市が、国土にいくつかハブとして必要になります。福岡もそういうポジションを有する都市の一つであり、急激な変化はないでしょう。逆にそのポジションを維持できないようでは、周辺もろとも地盤沈下していくことになります。

フィジカルな、つまり物理的な体験をできる場が必要な時があります。コンサートや美術展など、生の体験ができる場を提供する機能は、ある程度人口密度のある都市が担うべきです。

IT に関しても、新しいものが生まれる際に、直接人と会う濃密なコミュニケーションがある方がイノベーションは起きやすく、人々が交流する場所としてのハブの存在、また、そういう機能を持つ都市の存在は無視できません。これも実は人のマインドによるもので、コンピュータ化が進めばその重要性は低下していくでしょうが、今後 5～10 年ぐらいの間ではその重要性はまだ残るものと思います。

生の体験を本物とする既存価値観にも変化が

人の生活にリアルな文化はある程度必要で、地方だから生の体験を享受できないというのでは不健全だと思います。

しかしながら、文化の生の体験がどこまで IT に置き換わるかは私にも読めません。例えば 70 年ぐらい前までは生の演劇が一流の文化で、生ではない映画は二流の文化と目されていた時代がありました。しかし、現在では映画も立派な文化で、映像でないと実現しない世界もあるほどです。それと同様に、今後インターネットが映画に取って代わるような緩やかな文化の変化が起こっていると私は思います。

ルーブル美術館でミロのヴィーナスをこの目で見たとか、野球を球場で現地観戦したといった“生の体験”を至上とする価値観が今はあると思います。しかし、インターネット上で彫刻の細部まで見たり、様々な情報とミックスしたりしながらミロのヴィーナスを鑑賞する方が良い、あるいは、こちらは既にそういう人の方が多いのではないかと思いますが、インターネットやラジオから得られる様々な情報とミックスしながら野球を観る方が楽しい、といった価値観が主流になる日が来るかもしれません。そうなると「本物とは何か？」が移り変わる世の中になるかもしれませんね。

また、過去の経験則ですが、本物へのこだわりがある人は、イノベーションのジレンマに陥りやすいと言えます。新しいモノが出現した時、既存のモノが本物だ、という態度を取ると失敗に陥りやすいのです。馬車が主流の時代に自動車が登場した時、「車は信用ならない」と当時主流の馬車に重きを置き、新興の自動車を軽んじる人々もいましたが、その後の流れは改めて言うまでもありません。

都市機能をよく考え、周辺部との良好な関係を

こうした既存のモノを本物と考えるマイン

ドは、地方が都会よりも相対的に高いというハンディキャップは厳然としてあると思います。中山間地域など、こうしたマインドもインフラもハンディキャップが厳しく、集落維持ができるかどうか、消滅するとしてそれで本当にいいのかと危惧しています。

福岡でも文化や交流インフラの機能を都市として提供することが必要かどうか議論して、都心と周辺部との良好な関係を築けるとよいと思います。端的に言えば、周辺部を維持するのか、切り捨てるのかということです。

この関係性はフラクタルで、福岡が都合のいいように周辺部を切り捨てていると、東京や上海から福岡が都合よく切り捨てられるかもしれません。インフラ整備の観点では人口の集約はある程度必要ですが、人間の観点ではもう少し違う解になるでしょう。この解は難しいですが、私は「もっと住みやすい場所がある」というのがその一つの解ではないかと考えます。

アジアとの向き合い方を率先して考え、固めよ

私は月１回程度福岡を訪れていますが、街のサイズもちょうど良く、適度に核が分散し、交通利便性の高い良い都市だと思います。

ただ、敢えて言うならば、福岡はアジアの人を多く見かける、アジアからのゲートウエイとしてユニークな場所ですが、そのポジションを、どう捉え、どうしていきたいかを真剣に考えなくてはならないでしょう。将来的な人口減少とそれに付随する労働力の問題、また、多様性の問題がありますが、人の多様性が増すことで、新しい文化が生まれたり、街の活気が出たりするプラスの面もあれば、日本人ならではの閉鎖性に根ざすマイナスの面もあります。

私達一人一人がその両面を感じていると思いますが、どちらを取るのか、近い将来日本全体でちゃんと決めなければならなくなるでしょう。その中でも福岡は地理的近接性もありますから、他の地域よりも率先してそれを考え、ポジションを決め、アクションを取ることが求められる都市ではないかと考えます。

場所の制約が無くなることは脅威かつ機会

IT 社会の進展でビジネスも変わります。場所の制約が無くなる話をしましたが、それは当然国内に限らず、情報も絡んだお金のやり取りが国境を越えて活発化していくでしょう。

これは福岡にとって脅威でもあり機会でもあります。例えば東京と福岡の間でも、「もっとビジネスチャンスを得たい」と福岡から東京に移る人や企業もあれば、逆に「地方でも就業環境は良く、機会もある」と東京から福岡へ動く人や企業もあるでしょう。これと同様のことが上海との間に起こり得るということです。海外の都市が競争相手になるのは脅威でしょうし、海外の都市がマーケットになるのは機会です。

どちら向きの流れが加速するのかは分かりませんが、その都市の本質的な事象ではなく、例えば「福岡はホスピタリティが高いよね」といった口コミでそうした流れが加速するかもしれません。漫然としていると脱落する人も出てくるでしょうし、逆に差別化して成功の幅が拡大する人も出てくるようになると思います。

人が満足する生活多様性を提示できる社会に

私の理想とする世界は、本人が満足できる生活ができる世の中です。その満足を量る価値観は、都会が好きな人だと「どれだけお金持ちか」といった経済的な指標を求める傾向が多く、地方が好きな人は経済面以外の指標を求め、満足している人が多いような印象を持っていますが、どちらにせよ、人の満足する生活の多様性を提示できる社会になればいいな、と思うのです。

また、やる気、やりがい、やってて楽しい、

という盛り上がりも大事です。私の知る福岡の人は、皆やりがいを持って楽しみ、積極的な人が多く、そういう人を見ると幸せそうに感じます。もし、福岡の人の多くが彼らと同様ならば、それは大変良い点ですから伸ばすように努めてほしいですね。福岡の人は熱しやすく冷めやすいとも言われるようですが、Ruby に関しては３年ほど経ちますがそうでもないですよ。仮に熱が冷めたら、Ruby 開発者としては勿論寂しいですが、それでも、次々と人々が熱くなれる仕掛けが出てくるようになるのであれば、それでよいと私は思います。

何事にも功罪両面がある

私が開発した Ruby は島根県や松江市に産業育成として支援頂いていますが、この地は人口も少なく、IT 人材の層が薄いことは理解頂けると思います。しかし、人口が少ない故に名前の浸透が早く、Ruby が何かはよく知らなくても、その名を耳にしたことがある県民や市民は多く、そこから仕事が生まれることもあるのです。福岡は人口も多く、IT 人材の層も厚いですが、おそらく県民や市民の Ruby の認知度は低いでしょう。それは IT 業界の外では Ruby が存在していないのと同じです。

この状況は興味深い対比で、産業の社会全体に対するキーワード化の面では、人口が少ない方が有利に働くということを表しています。私と同様のことをする人は東京にも福岡にもいますが、人口が少ない場所でやるとそれが目立って取り上げられ、一旦取り上げられると 47(県)分の１(県)の情報となって「島根県になんだかすごい事をしている人がいる」と人々の耳目を集めることになったわけです。結果論かもしれませんが、名をあげるには大都市より地方が有利な場合もある、ということです。

とはいえ、IT の世界は特にトレードオフが多く、何事にも功罪両面があるので、常にそのどちらがいいかの選択経験を重ねています。これは政治でも同様ではないでしょうか。選択肢は周囲が示せても、最終的にどうするかはやはり当事者、トップが決めるべきことです。福岡でも様々な面で良い判断がなされることを期待しています。

インタビュー日:2011/8/2 文責:URC 白浜